

「扶桑町」 Ⅰ人Ⅰ台端末の利活用に係る計画

Ⅰ. Ⅰ人Ⅰ台端末を始めとする ICT 環境によって実現を目指す学びの姿

これからの子どもたちは、判断力や表現力を含めた幅広い学力（確かな学力）が求められている。そこで、めまぐるしく変化する社会で生きていくために、扶桑町では、「学びを子どもに委ねる」をスローガンに、Ⅰ人Ⅰ台端末等の ICT 機器を活用し、自ら課題に取り組んだり、協働して課題に取り組んだりする互いに学び合う教育を目指している。

子どもたちが自ら課題に取り組んだり協働して課題に取り組んだりする姿とは、自分のペースで納得のいくまで課題に取り組んだり、学んだことを自分なりの工夫で表現し発信したり、他の意見から新たな課題を発見したりしながら学んでいくような姿である。

Ⅰ人Ⅰ台端末やクラウド環境があれば、多くの情報の中から自分が必要とする情報を選び、整理し、自分の考えを様々な方法で表現・発信することができる。また、友達の学び方を参考にしたり友達の考えを知ったりすることから多面的・多角的な視点が生まれ、自らの学びを深めることができる。

このようにⅠ人Ⅰ台端末とクラウドを活用した環境の中で、互いに学び合う教育を推進する。

2. GIGA 第Ⅰ期の総括

GIGA 第Ⅰ期では、端末として iPad を児童生徒、教職員に整備をしてきた。また、各校の無線 LAN 環境（IG のベストエフォート回線）を整備し、ICT 環境（Google Workspace）を十分に活用することができる環境整備をしてきた。

コロナ禍の休校で、子ども達に自ら学ぶ力をつけることができていないことを実感した。そのため、Ⅰ人Ⅰ台端末導入後は、とにかく使ってみるという意識で活用を始めた。授業での活用場面を模索することはもちろん、児童会・生徒会、委員会、部活動、クラブ活動、係活動など、あらゆる場面での有効活用を試みた。その際、有効なアプリがあれば学校間で共有するなど、扶桑町全体で ICT の活用を推進するようにした。

具体的には、タブレット端末のカメラ機能を使って情報をまとめたり、検索機能を使って学習に必要な情報を集めたり、体育等で自分の動きとお手本の動きを動画で比較して改善したりするなど学習で活用が広がった。また、低学年はローマ字入力ができない場合もあるため、手書き入力も大いに活用した。

小学校高学年や中学生では、情報の収集、集めた情報の整理・分析、まとめるといった過程でタブレットを活用して、個別最適な学びの実現に向けて取り組んだ。また、グループ学習で意見や考えを共有する場面でもタブレットを活用し、話し合いを深めた。タブレット端末を使ってクラウドを活用することで、互いの学習の様子がわかるようになったことが、子どもの学びを助けることになった。自分と同じ考え・違う考えにふれることで自分の考えの質をよくするきっかけとなった。このように、ある場面だけで使うのではなく、日常的にⅠ人Ⅰ台端末とクラウドを活用することで、自ら課題に取り組んだり、協働して課題に取り組んだりする互いに学び合う教育の手立てとなっていった。

令和 6 年 4 月に実施された全国学力学習状況調査の学校質問紙では、タブレット・ICT 機器に関わる項目において以下の回答であった。

質問事項	回答
前年度に、教員が大型提示装置等（プロジェクター、電子黒板等）の ICT 機器を活用した授業を 1 クラス当たりどの程度 行いましたか。	週 3 回以上 (100%)
教員がコンピュータなどの ICT 機器の使い方を学ぶために必要な研修機会がありますか。	ある・どちらかと言えはある (83.3%)
調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、児童一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器を、授業でどの程度活用しましたか。	週 3 回以上 (100%)
調査対象学年の児童生徒が自分で調べる場面（ウェブブラウザによるインターネット検索等）では、児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか。	週 3 回以上 (50%)
調査対象学年の児童生徒が自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか。	週 1 回以上 (83.3%)
教職員と調査対象学年の児童生徒がやりとりする場面では、児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか。	週 3 回以上 (100%)
調査対象学年の児童生徒同士がやりとりする場面では、児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか。	週 1 回以上 (66.6%)
調査対象学年の児童生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面では、児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか。	週 1 回以上 (83.3%)
児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器について、次のような用途でどの程度活用していますか。	
(1) 不登校児童生徒に対する学習活動等の支援	月 1 回以上 (33.3%)
(2) 希望する不登校児童生徒に対する授業配備	月 1 回以上 (16.6)
(3) 特別な支援を要する児童生徒に対する学習活動等の支援	週 3 回以上 (83.3%)
(4) 外国人児童生徒に対する学習活動等の支援	活用していない
(5) 児童生徒の心身の状況の把握	月 1 回以上 (50.0%)

障害のある児童生徒が一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器を活用する際、入出力支援装置等を活用し、障害種・障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた支援をどの程度行いましたか。	よく行った (16.6%)
--	------------------

自ら課題に取り組んだり、協働して課題に取り組んだりし、互いに学び合う教育を推進する中で明らかになってきた課題は、教師による子ども一人一人のみと助言の方法、そして学びを子どもに委ねるタイミングや程度といった内容である。一人一人の活動がクラウドによって以前より見えやすくなったものの、クラス全員の活動や進捗をどのように把握していくのか、助言の内容やタイミングを一人一人の個性によってどのように工夫していくのかなど、教師のファシリテーターとしての資質能力が課題となってきた。

各校による個別最適・協働的な学びの進み具合の差も課題である。タブレットとクラウドの活用はすべての学校で始まっているが、自ら課題に取り組んだり、協働して課題に取り組んだりする授業展開は各校さまざまである。すべての学校で個別最適・協働的な学びが共存し、互いに学び合う環境がより広がっていくよう、今後も推進していく。

また、不登校や障害、言語等の問題を抱えている児童生徒に対しても、利活用の方法を模索していく必要がある。

3. 1人1台端末の利活用方策

今回の端末の整備・更新により、1人1台端末とクラウド環境を引き続き維持していく。1人1台端末の日常的な活用から学び合いを充実させることについては、各校で取り組みの差がある。先進的に実践・研究を進め、学び合いを充実させている学校の取組を町内の学校に広く展開し、教師自身が実際にみることで主体的に学ぶことができるようにしていく。また、実践共有や子ども達と同じ環境を使った教員研修の充実に取り組んでいくことで、町内すべての学校で学び合う授業展開を実現できるようにする。

1人1台端末を活用した学びの保障についても、取り組みを模索していく。不登校児童生徒への支援、外国人児童生徒への支援、障害のある児童生徒への支援について、保護者への丁寧な説明をしていく必要がある。学びの保障についても、町内すべての学校で実現することを目指していく。